

教科等研究会（小学校図画工作部会） 平成28年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

どの子ども楽しく 「見つめ・感じ・つくりだす」図画工作科の授業づくり

2 研究経過

第1回			第2回			第3回			第4回		
5/26	26人	御船中学校	8/16	甲佐中学校	実技研修	10/25	小坂小学校	小田真莉絵教諭	1/27	益城中学校	中川幸恵教諭

3 研究の概要

(1) 研究の内容

① テーマの設定

本年度の上益城郡教科等研究会全体テーマ、「一人ひとりが輝く『分かる・できる』『楽しい』授業づくり」を受け、昨年度設定したテーマをさらに継続して研究を進めていくことにした。図画工作科の目標は、「感性を働かせながら、つくりだす喜び」を味わわせることであり、「創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことにある。しかし、図画工作科の授業において、「不器用だ」「不得意だ」と苦手意識を持って過ごす子どももいる。そのような子どもたちも全員が参加でき、理解し、習得し、活動していくことができるようにすることが求められる。そのため、授業のUD化の視点を持ち、「焦点化」「視覚化」「共有化」を図り「どの子ども楽しく『見つめ・感じ・つくりだす』図画工作科の授業づくり」を研究していくこととした。

② 実技研修

実技研修会では、横山忠克先生をお招きし、身近な材料を使った工作の実技研修を行った。紙の性質を生かした変わり絵、画用紙で作るスリッパ、空き缶と紙粘土を材料にした笛作りを行った。「驚きを持って教材と出会わせる」「遊びに直結した題材が製作意欲に結びつく」ことを体験しながら学ぶことができた。教材は変わっても、児童を引きつける教材との出会わせ方、自分にもできると思わせる製作の手順の示し方などが理解できた。会員からも、実際に作品作りをすることで、子どもの気持ちになって学ぶことができた。指導の際にどんな声かけをしたら効果的か体験から考えることができたとの声が聞かれた。



③ 研究授業

授業のUD化を視点に教材の研究を行った。描画が苦手だと思える児童も楽しく参加でき、既成のイメージにとらわれずに製作できるものという授業者の願いから、スチレン版画が提案された。実技研修の中で試作し、指導にあたっての手順やポイントとなることを検討した。偶然できた形から発想するため、思いもよらない形ができるおもしろさがあった。描画の技術に関係なく、楽しい作品ができ、子どもたちの発想を活かせる教材になるのではと話し合われた。さらに教材化の際に課題となる点も発見できた。会員の多くは、スチレン版画の経験があまり無かったが、加工や刷りのしやすさなどが分かり、教材としてぜひ使ってみたいという声も上がった。



授業研究会では、授業のUD化の視点から、スモールステップをふんだ授業や作品提示の方法のよさ、みんなが夢中になってできる教材であったことが多く出された。しかし、指導をしている中で全員の活動のみとりをする難しさが話題に上った。評価の場面や観点を明確にしていくことが今後の課題である。

(2) 成果と課題

- 実技研修では、実際に児童と同じ材料を使って、教材を研究することができた。また、会員どうして情報を交換したり指導方法を相談したりすることができた。
- 研究授業では、小学校・中学校、共通の指導案の形式を使用した。（※指導案の形式は、御船町立小坂小学校で研究されたものを元になっている。）同じUDの視点を持って授業の研究に臨むことができ、活発に議論ができた。
- 今回の提案授業で、描画の力に関係なく取り組める題材が研究できた。今後、教材を選ぶ際の考え方の方向性のひとつが分かった。
- △ 新たな教材の研究ができたことは大きな成果であったが、指導をしていく中で、評価をどのような場面で、どのような観点で行うかを明確にする必要がある。
- △ 授業の中で、作品を見合うことで共有化をはかったが、子どもたちがもっと意見を交流できる方法を探っていく必要がある。表現活動での共有化の方法を研究していきたい。

4 実践事例

(1) 授業の概要

第3学年「版からひろがる世界」授業者 小田 真莉絵 教諭（小坂小学校）

本題材は、スチレン板にスタンプ遊びをしたものを、自由な形に切り分け、それを組み合わせ「ゆかいな恐竜」の版を作るというものである。偶然できた形から想像して恐竜をつくることで既成の恐竜のイメージにとらわれずに表現を楽しむことをねらったものであった。自分で作ったパーツを組み合わせることで、何を描いたらよいか悩んだり、描画に自信がなく描きはじめられないといった苦手意識を持った子どもたちでも取り組める内容になっていた。それまでの紙版画や木版画などのイメージを崩し、自由な発想を広げることができる題材であった。

導入では、スモールステップに分けた作業の順を提示したり、見本を動かす様子を実際に見せたりして児童が何をすればよいか明確にされていた。そのため作業中は、迷うことなくみんなが黙々と集中して活動することができた。

また、豊かな発想が求められるこの題材では「ゆかいな恐竜」がどのようなものか、子どもたちのイメージを広げる場面が重要であることが議論された。



(2) 学習指導案

※指導案の形式は、御船町立小坂小学校で研究されたものを元になっている。

小学校授業

小学校 3 年

分野： 表現

題材名 「版から広がる世界」
授業者 小田 真莉絵（御船町立小坂小学校）
場 所 3 年 2 組 教室

題材について

本題材は、「版のつくり方や写し方を工夫する」ことを通して、形や色、方法や材料を工夫する力を培うことを目標としている。今回は、スチレン板を使って、町のシンボルである「恐竜」をテーマとして、オリジナルの恐竜の版をつくり、形の組み合わせの偶然性を楽しみながら、模様、写し方等を工夫して作品をつくりあげる。自分たちの町に笑顔と元気を届けようという大きな復興プロジェクトとして、自分の表したいイメージを持ち、版をつくる楽しさや刷ったときの喜びを味わうことを大切にしていく。

UD の視点

作業の手順を模範で提示したり、「模様をつける」「パーツに切り分ける」「組み合わせを試す」「貼り合わせる」と活動をスモールステップ化することで、全ての児童が安心して活動に入れるようにする。また、「形の組み合わせの偶然性を楽しむ」という視点を与えるために、導入の時間を大切に、既存の形にとらわれずに自由な発想で、自分の考える「ゆかい」のイメージを膨らませることができるようにする。お互いの作品の良さを見つけ合う時間を取り入れ、児童個々の発想を広げていく。

指導計画（7 時間扱い）

テーマを設定し、スチレン版に模様をつける。その後、パーツに切り分け、形の組み合わせの偶然性を楽しみながら恐竜の版をつくり、刷る。
(1～4/7 時間 本時:2/7 時間)

恐竜の版から想像を広げ、自分の表したい周囲の様子を表現する。
(5/7 時間)

恐竜の版と背景画を組み合わせる。
(6/7 時間)

作品を鑑賞する。
(7/7 時間)

題材の目標

- 関 版をつくったり、写したりすることに関心をもち、いろいろな表し方を楽しむことができる。
- 発 版をつくったり、写したりすることから想像を広げ、自分なりのイメージを持って、表現の工夫を考えることができる。
- 技 パーツの組み合わせを考えたり、模様を加えたりしながら、版をつくることができる。
- 鑑 友だちや自分の発想のおもしろさ、表現のよさや工夫を自分の言葉に表し、伝え合うことができる。

本時の目標

目指す子どもの姿

パーツの組み合わせを試行錯誤しながら、自分の表したいイメージの恐竜の版をつくることができる。

児童生徒の実態

活動は楽しんでいるが、作業が難しくなってしまう児童や、なかなか発想が広がりにくい児童が数名いる。

友達の作品のよさは、活動の中でも気付いてよく賞賛する姿が見られる。

本時のめあて

パーツの組み合わせを考えて、「ゆかいな恐竜」をつくろう。

学習活動

発問や指示

UDの手立て

①

5分

作品テーマ「ゆかいな」について考える。

「ゆかいな」恐竜とはどんな恐竜でしょうか。

【視覚化】

代表作品の「タイトル」から恐竜の姿を想像させるとともに、作品提示の仕方を工夫することで、イメージを膨らませる。

②

5分

作業内容を確認する。

今日は、メニューの中の②「パーツをならべる」③「パーツをはる」活動をししょう。

【スモールステップ化】

最初に模範を示し、同じパーツでも組み合わせ方によって違いが出ることに気付かせる。

③

30分

恐竜の版づくりに取り組む。

〈主発問〉
どのようにパーツを組み合わせるとあなたが思う「ゆかいな」恐竜になるだろう。

【焦点化】

机の上でパーツを動かす時間を意図的に設定することで、組み合わせによるイメージのちがいに気付かせる。

④

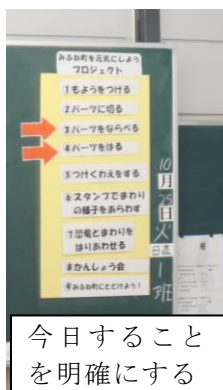
5分

本時の学習をふりかえっての感想を交流する。

作品の見せあっこをして、いいところポイントを見つけましょう。

【共有化】

お互いの作品を見せ合った中での気づきを、次時の活動の参考にさせる。



今日することを明確にする



